令和4年度厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）
併存疾患に注目した認知症重症化予防のための研究
分担研究報告書

外来通院排尿障害患者の認知機能と治療薬の実態調査

研究分担者　堀江重郎　順天堂大学大学院医学研究科　泌尿器外科学主任教授
研究協力者　高澤直子　順天堂東京江東高齢者医療センター　泌尿器科准教授

研究要旨: 過活動膀胱・尿失禁で治療を要する患者の認知機能と過活動膀胱に対する治療内容について実態を調査した。

A. 研究目的

認知機能障害と下部尿路症状とは関連しており、認知症集団における尿失禁保有率が一般集団と比較して高いこと、過活動膀胱治療における抗コリン薬は認知機能へ影響があると考えられるがその実態を調査した研究は少ない。両疾患の合併例に対する適切な治療指針の確立は課題であると考えられる。現在過活動膀胱・尿失禁で治療を要する患者の認知機能と過活動膀胱に対する治療内容について実態を調査した。

B. 研究方法

2022 年 6 月から 2022 年 12 月までに順天堂東京江東高齢者医療センター泌尿器科に通院中の過活動膀胱や尿失禁症状を有する患者 200 人を対象に認知機能調査を行った。

C. 研究結果

対象は 200 人、男性 64 人、女性 136 人。平均年齢 80.09 歳（66—91）、男性平均年齢 80.08 歳(70—90)、女性平均年齢 80.09 歳（66—91）。MMSE 平均 25.6 点(10-30)、男性 25.6 点(10-30)、女性 25.6 点(15-30)であった。MMSE20 点以下は全体で 23 名(11.5%)、男性 11 名、女性 12 名であった。排尿症状に対する内服薬は β3アドレナリン受容体作動薬（β3受容体作動薬）内服が 127 名（63%）、抗コリン薬内服が 28 名（14%）、β3受容体作動薬と抗コリン薬の併用が 17 名（9%）で、そのほかの治療は 29 名（14%）であった。抗コリン薬を内服している患者の MMSE 平均は 25.6 点、β3アドレナリン受容体作動薬を単独で内服している患者の MMSE 平均は 25.8 点で有意差は認められなかった。

D. 考察

排尿障害の治療のために通院している患者の 11.5%に MMSE20 点以下の認知機能低下を合併している患者が存在していた。今回の調査では蓄尿症状に対する薬剤は抗コリン薬 23%、β3受容体作動薬 63%と β3受容体作動薬が選択されていた。「高齢者の安全な薬物療法ガイドライン 2015」では抗コリン薬の使用は認知機能障害のリスクから慎重な投与を要する薬剤に分類されている。β3 受容体作動薬の過活動膀胱に対する有効性については十分なエビデンスがあり、近年は 75 歳以上の高齢者に対しても同様の有効性が示されており「フレイル高齢者・ 認知機能低下高齢者の下部尿路機能障害に対する診療ガイドライン 2021」において、フレイル高齢者、軽度認知機能低下高齢者の過活動膀胱の薬物治療においても推奨されている。現在、本邦ではミラベグロンとビベググロンの2剤が健康保

険適用となっている。このような背景から比較的 β３受容体作動薬が選択されていたと考えられる。

E. 排尿障害の治療のために通院している患者の 11.5%に MMSE20 点以下の認知機能低下を合併している患者が存在していた。蓄尿症状に対する薬剤は 63%で β３受容体作動薬が選択されていた。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3.その他

該当なし